

イギリス女性作家の半世紀

4

80年代・
女が語る



現代女性作家研究会
伊藤 節 編

イギリス女性作家の半世紀

4

80年代
女が語る
蔵書章



現代女性作家研究会 編

80年代・女が語る イギリス女性作家の半世紀4

1999年9月25日 第1版第1刷発行

編者 現代女性作家研究会
伊藤 節

発行者 井村 寿人

発行所 株式会社 勁草書房

112-0004 東京都文京区後楽 2-23-15 振替 00150-2-175253

電話(編集) 03-3815-5277 (営業) 03-3814-6861

FAX 03-3814-6854

大日本法令印刷・和田製本

©ITÔ Setsu 1999 Printed in Japan

*落丁本・乱丁本はお取替いたします。

*本書の全部または一部の複写・複製・転記載および磁気または光記録媒体への入力等を禁じます。

ISBN4-326-89886-0

<http://www.keisoshobo.co.jp>

刊行のことば

まもなく二一世紀を迎えようとするいま、この歴史的節目に立ち、第二次大戦以降の半世紀を振り返ってみると、ただちに「壊」のひとことが浮かび上がってくる。ふたつの大戦は歴史に類をみない大仕掛けな破壊行為であった。だがそれとは別種の、社会体制をくつがえすほど大規模な「壊」が、大戦が終結した後じわじわと、女／男たちの意識革命から始まっていたと言えるのではないだろうか。わたしたちは何を壊し、何を創ろうとしてきたのか。何を見直し、何をやり直そうとしているのか。イギリス（英語圏）女性作家が文学作品のなかで「問い」、「壊し」、「集い」、「語り」、「拓く」、その多彩な営為を読み解くことにより、それぞれの時代における価値観の推移とその再編成の特徴がおのずと見えてくる。激しく変化してきたこの半世紀を〈女の視点〉から多角的に検証する——それが、このシリーズの目的である。

現代女性作家研究会は、勁草書房の女性編集者の協力を得て、『現代イギリスの女性作家』（一九八六）、ついで『現代イギリス女性作家を読む』全五巻（一九九一・九二）を世に送り出してきた。今回のシリーズに登場する作家は四五人、なかには二巻、三巻にわたって登場するものもある。まずはゆ

たかな小説世界とその〈読み〉を楽しんでいただき、そして、現代の様々な問題とともに考える機縁となれば幸いである。

一九九九年 盛夏

編者

80年代・女が語る／目次

序	80年代・女が語る		伊藤	節	1
---	-----------	-------	----	---	---

第1章	断片（切り裂かれた女）のコーラージュ		伊藤	節	9
	エマ・テナント『ロンドンの二人の女』				

1	テクストの書き換えと新たな物語の構築	11
2	庭園殺人のミステリー	15
3	二重性への関心	20
4	クロゼットの犯罪	23
5	原罪と現代の罪	25

第2章	マリアによる福音書		宮澤	邦子	37
	ミッシェル・ロバーツ『野生の女』				

1	マリアとは誰のことか	39
2	自分の言葉と声によって	44
3	語り手を支えた研究者たち	48

- 4 「正統」の解体 51
- 5 ヴィジョンを織る 55

第3章

書く女

ジェイン・ガードム『クルーソーの娘』

岡村 直美 61

- 1 書き終わらなかった女の自伝 63
- 2 「女クルーソー」と「クルーソーの娘」の差 70
- 3 女がクルーソーになれなかった（ならなかった）わけ 77

第4章

ジェインの感情教育

ドリス・レッシング『ジェイン・ソマーズの日記』

太田 洋子 87

- 1 筆名、ジェイン・ソマーズ 89
- 2 日記をつけるジェイン 92
- 3 ジェインの変化 95
- 4 ジェインの自己認識の深化 101
- 5 『ジェイン・ソマーズの日記』の意味 107

第5章 結婚しない女 田嶋 陽子 117

アニタ・ブルックナー『秋のホテル』

1 結婚への誘惑——自分の居場所を求めて 119

2 結婚制度を支える女たち 126

3 二組の母娘関係 131

4 自己肯定とロマンス批判 137

第6章 死者を悼む 榎本眞理子 147

エレイン・ファインスタイン『国境』

1 インゲと物語 149

2 ユダヤ人であること、女であること 152

3 愛という病、または共依存 157

4 様々な境界線 160

5 語ること、そして希望 164

第7章 「万華鏡」をとおして見る歴史 鈴木 和子 173

ペネロピ・ライヴリー『ムーン・タイガー』

1 多様な視点 175

2 「新しい女」クローディア 178

3 クローディアの誤り 182

4 クローディアの矛盾 186

5 新しい歴史物語 191

第8章 道化からの脱皮——人間復活……………武井 誠子 197

ローズ・トレメイン『王政復古』

1 混沌の新時代 199

2 メリヴェルと女性 205

3 ふつうの人間へ 210

4 再生 216

第9章 二つの〈核〉への警鐘……………鷺見八重子 225

フェイ・ウェルドン『ジョアンナ・メイのクローンたち』

1 単為生殖、細胞の分裂または増殖 227

2 クローン人間、主体の解体または生成 234

3 チェルノブイリ、生命の危機そして再生 240

第10章

ジェンダーと語りの魔術……………窪田 憲子 253
ジャネット・ウインタスン『パッション』

1 語りの魔術師ウインタスン 255

2 ナポレオンのモスクワ遠征がとりもつ恋物語 257

3 絢爛たるマジック・リアリズムの舞 263

4 ジェンダーの逆転の構図 266

5 気球に乗った認識の掃除人 273

文献案内 7

索引 3

序 80年代・女が語る

伊藤 節

一九八〇年代のイギリス女性作家たちによる文学風景は、本書に収められた一〇編——どれもこの年代に注目を浴びた作品である——を読むだけでも驚くほど多様で多彩な展開を示していることがわかる。それはこの時代のフェミニストたちに多用された歴史の書き直し、評価のし直し、過去の作品の読み直し、〈女〉というものの創り直しというキーワードに呼応するように、大胆な〈直し〉の意識に満ちている。性愛や家族、社会生活などを支配する価値観の大きな変化にともなって、ストーリーの伝統的枠組が壊され、新しい語り（ナラティヴ）が広がりはじめたのである。

すなわち八〇年代は、人間の、特にそのセクシュアリティをめぐって解体され、再形成される自己意識を確かめ、それにふさわしい新しいナラティヴが生み出され、増殖していった時代である。ここには、男性作家の意図しない新しいヴィジョンを透視する、女性作家たちの想像力が大きく寄与していると言いうことができる。

アイデンティティという問題も、この時代になると自明ということからほど遠く、それはますます

断片化し、不安定になり、論議を呼ぶものとなった。ジェンダー、宗教、道徳性などをめぐる伝統的アイデンティティについての物語と、それを支える絶対的で普遍的な原理は、とりわけ女性作家たちによって劇的にその根拠を揺り動かされ始めていったのである。

こうした動きの背景には、六〇年代後半「抑圧された多数の存在」の立場から、既成のあらゆる秩序批判をかかげて始まる第二波フェミニズム運動と、そこから誕生したフェミニズム批評という知の革命の影響があることはいうまでもない。この新しい批評方法は、父権的伝統に支配されてきた文学に政治を読みこむという新しい視点を導入し、文学研究を、女性の存在そのものと、それを取り巻く社会、文化について根本的に問い直すラディカルな営みへと大きく変えていった。女たちが物語ること、書くことは、自然で本能的な想像力の流出ではなく、そこにありとあらゆる意味での抑圧が作用している。これは読む側の女性の反応についてもあてはまる。ということから、女性の自己認識や表現を制限してきたそれぞれの社会的文化的秩序を無意識を越えるような次元にいたるまで徹底的に吟味し直すことが急務となった。一九八〇年代は、この批評理論の担い手たちにさらに多くの優れた研究者たち（中でも『文化としての他者』（一九八七）を著わしたインド出身のガヤトリ・スピヴァックの名は特筆にあたいする）が加わって、その理論化、成熟への度合いを一層深めていった時代である。

ことをイギリス小説という分野に絞って見てみると、ここでは女性作家の系譜が過去より脈々と続き、女性は男性にひけをとらない活躍をしてきたとひとまず言える。だが、男性並の活躍をするために彼女たちがいかに多くのことを代償にしてきたか、つまり自己の経験についての真実をねじ曲げた

り、もしくは沈黙し、それとは「別な物語」を語ってきたか、ということがこのフェミニズム批評によって明らかにされてきた。いかなる物語を、どのような方法で語り、あるいはいかなる物語を語らないのか、は権力の構造とからんでくる。権力は血液と同じく語るものの意識のすべての層に浸透し、語り方を規定すると考えるのである。

事実、何世紀にもわたって権力の領域から追放されてきた女性の真の声や物語は否定され、消し去られてきた。経験は声をもち明確化されない限り意味を与えられず、女性作家たちは自分たちを支配する「正統な物語」に呪縛され、そこから解き放たれようがなかったのである。ドリス・レスリングが『黄金のノート』の序文で述べているように、かのジョージ・エリオットもヴィクトリア朝の支配的価値観にがんじがらめになり、「懸命に道徳的であろうとするため理解できないことが多くあった」のである。もっとも、このような視点は既に今世紀初頭ヴァージニア・ウルフが『自分だけの部屋』においてはっきりと示している。

しかし世界中の女性研究者がいっせいにこの問題に取り組み始めたというのはまったく新しい現象であった。それははかりしれない大きな力となって女性作家たちの創作のあり方を変えていった。個人的なことは政治的なことであり、公的なものにつながるのとフェミニズムの主張に励まされるかたちで、私的なこと、特に、性や、欲望、他者との様々な関係性について、彼女たち自身のことばで率直に語る作品が少しずつ出はじめていったのである。この傾向は八〇年代に入り、歴史家たちの「下からの歴史」、民衆文化の歴史を語ろうとする新しい歴史叙述への動き——それは、経験やアイデン

ティティ、政治についての単線の見方を根本から修正する動きでもある——によって大きく弾みをつけられていく。この年代に顕著になった「新しい語り」は、彼女たち自身にとっての新しい価値観を探り、表出するもので、そこにはもう壮大で絶対的な真実などというもののへの関心は見られなくなっていく。

このような伝統的ナラティヴの装置が崩れていく傾向は、マスメディアの発達によってさらに拍車をかけられていった。生活様式が大きく変わり、一般の人々も思いのままに自己表現を始めていく風潮が生まれたのである。八〇年代に作られた家庭用ビデオもまたたく間に広がり、素人がいともあっさり自分自身についてのドラマを作ってしまうまでになった。安価な大衆的ペーパーバックも八〇年代になると大活躍し、フィクションだけではなく、新しい生き方、新しい価値、秩序を提示するようなノンフィクションのベストセラーが数多く世に送り出された。「自分の体験」にもとづき、シンデレラ願望——依存的性格について分析的に語ったコレット・ダウリングの『シンデレラ・コンプレックス』（一九八一）などは、その代表例の一つである。

こうして文学の領域以外でも以前には見られなかった多くの新鮮なナラティヴが世に出まわり、語ること、書くことはもう作家たちのみの特権的活動ではなくなった。それぞれが自分を語ることによって自分の生き方をもっと理解したいという願いを強くしていき、そのために他人の新しい作品をも熱心に読むという循環が生まれ、表現様式は多様に広がり、文学の境界線も曖昧なものとなっていく。そしてこれらすべてが相乗的效果を生みだし、女性のみならず、社会の意識変革を促していった

のである。

もちろんフェミニズム運動のもろもろが文学の現場と直接に重なってくるというものではない。しかし、それは女性の執筆を取り巻く環境をはっきりと変えた。好むと好まないにかかわらず、直接的にしろ間接的にしろ、彼女たちはフェミニズム的価値観によって、書くことにおける大きな刺激とエネルギーを与えられたということはできるのである。こうして、「女性たちの沈黙を破るために書かなければならない」と言うミッシェル・ロバーツはじめ、元気に満ちた女性作家たちは、自己の性と生活の再編成を目指し、感情、身体、言語についての新しい体験的思考方法を示唆するナラティブ創りに集中した。文学界はまさにフェミニズムの流れに寄り添うかたちで、女性作家の黄金時代の様相を呈し始めていったのである。特に、男性中心の伝統のもとで埋もれていた女性の作品を発掘することを目的とした、ヴィラーゴ出版の全盛期でもある八〇年代という時代は、そういった新しい意識が成熟してきた時期といえる。

さて、このような八〇年代を文化の面から概観し、その特性を抽出してみると、まずこの時代を席卷した、あらゆる対極的反対物の境界解体として特徴づけられるポストモダンの言説があげられる。また、前述したように「上からの視点」に異議を唱え、文化的、社会的領域を視野に入れる、新しい歴史意識を掲げた新歴史主義の登場。さらに、女／男という性差についての考え方が、それらを変更可能な社会的構築物とみる「ジェンダー理論」に移行していったこと。のみならず、この女／男の対立概念はハイテク時代の進展によってもまた曖昧なものにされていく傾向が浮上してくる。

実際のところ、科学、テクノロジー、バイオテクノロジー、情報ネットワークの急速な発達は、人間存在そのものをも変えてしまうのではないかという危惧さえ生み出した。その究極が、フェイ・ウェルドンの作品に見られるようにクローンの誕生の予見である。これが実現するのは一九九七年であるが、この頃、女性の身体と科学、テクノロジーとの関係が一層緊密化され、身体は自然で所与のものであるどころか、政治的、社会的なものの一部であることがますます明確になっていったのである。また、社会的側面から見たときには、一九八〇年代をすっぱりと覆ったサッチャリズム（ヴィクトリア時代に特有であった価値観にもとづく保守党党首サッチャーの政策）をも見過すことができない。ヴィクトリア朝の道徳観や、「家庭の神話」、「女の神話」を再び強化するような美徳の賛美、ピューリタンの倫理の強要等が、社会に与えた影響である。八〇年代に突如はまりこんできた「ヴィクトリア時代」は、一九世紀の物語を呼び込み、新歴史主義による歴史の見直しの傾向と重なって、本書でも取り上げているような書き換えのテクストを数多く生み出している。

こうした文化、社会の変動の波に乗るかたちで、女性作家たちは自分たちの経験の世界に、歴史のなかで見失われていた多くの物語を発見し、それぞれ独自の視点と斬新な方法で語り始めたのである。彼女たちにとって語ることは、古い秩序の枠組から脱し、新しい自分を創ること、新しい価値観にもとづく生の可能性を示すものであった。それはローズ・トレメインの新しい歴史感覚で創られた作品に見られるように、女性だけではなく男性像のとらえ直しということをも含んでいる。

とはいえ、「変革」は言うほどには簡単なものでなく、感性に刷り込まれた古い意識を棄却するに